

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	更科日記地理考（承前）：論説
Author(s)	本田，江楠
Citation	龍南會雜誌， 1 2 9： 8 - 1 9
Issue date	1909-02-28
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6187
Right	

新安陳氏「反觀之則柔脆華辨之遠於仁可知矣」

羅馬を興し、精神上の原因は士民の質朴剛健の氣象である。羅馬を亡ぼしたのも亦た此氣象の進化を誤まり、遂に之を喪失した爲めである。龍南の學風は何時までも剛毅朴訥であつて、健兒諸君が進化、研究、力行を怠らず、科學的培養を加へたならば、舊式でもない淺薄でもない文學や美術や音樂と相容れないこともない。遂には仁道にも涅槃ニルヴァナにも天國パラダイスにも到達することが企てられぬでもないのである。吾輩は健兒諸君の理想が何處までも高、遠、大であることを望むと同時に、其の理想は堅實に諸君の現實と、調和する様に何事も飽まで研究的態度を執られんことを切望する。若しも諸君が日夕相唱して「その剛健の質なりて、玲瓏カレイドてらす人の道」とか「思は馳する朴訥の、流風薫る銀杏城」とか謠ふ時にても、剛毅は龍田山の神の宣託カレイドで、朴訥は清正公様の靈符であるといふ様な無我夢中の心持で居られたらば、校風の振興も百年江河の清を待つのと同様であらうと考へるのである。

更科日記地理考（承前）

本田 江楠

横走關

御殿場近傍説御殿場は今とは御厨町と改む十里木説十里木は須山の西、富士と足高との正中間にありとの二つあり。十里木説は詞林采

葉に載する所にて、同抄駿河國の條に「彼國には富士足鷹の二山あり中略此兩山の間昔は東海道の驛路なり其あはひに横走關といふありけり云々。其不二と足高との間と云ふ處今の十里木にて此所よ

り竹下の方に向ふ道ありて古の官道あり、更科日記に見えたるは今の十里木ある八幡社にてその社中に清水ありて一村の用水とある水あり其横走の關の跡今の卯野村ありと云へり」と見ゆ。仙覺萬葉抄、藻鹽草、名所方角抄共にこれと同説あり。然るに駿河新風土記に之を駁して曰く、「按に富士足高二山の間を通ひしこといとも昔のことにて中古驛傳の定めありし頃は十里木通には懸るべからざる道並あり蒲原柏原より次はよけれど高倉の驛今の長泉村大字長窪より横走の道並十里木は西の方に當ればかかるべきたよしあし略甲斐へ通るに平野村の山足に關路あり古の官道なりと云ふと見たり此日向村は竹の下に隣り竹下より足柄と横走とに別れてコノツナ越と云ふ道のあたり古の關にやあらん云々」尙ほ他の條に「今の東田中村ありと云ふ山燒の爲舊村里詳に知り難く横走の舊跡今小山村竹の下の隣村にあり」かど記せり。吉田氏地名辞書此邊の考証頗る詳にして、其十里木越の條下に「此を横走關と論じたるは誤れり横走は足柄竹の下の舊名とす然らば古へも捷徑を好みて蒲原より十里木越へかゝり（永倉柏原を迂回せず）直ちに足柄の横走關へ向ひし者もありて遂に十里木越を横走とも誤りしか」と云ひ、横走關址の條下に「此横走は駿河より相摸坂本と甲斐加古との兩路の歧頭にて關棚の設さへあり」と云へり。今按するに、延喜の兵部式に「駿河國驛馬。小川志太郎横田府中の町名にあり」と云へり。息津奥津富士郡今井の邊長倉長窪各十疋横走二十疋」とあるを見れば新風土記の説據るべくして、吉田氏の説の如く、横走は中世の竹之下、藍澤藍澤、合澤、過澤にも作る今の御殿場附近より南方大野原邊を稱せるものか同一地にて足柄の西麓からんも、孝標の女は所謂捷徑を取りて、富士足鷹兩山の間なる卯野村字十里木の邊を通過せしるべし。後世の僞作とは云へどかの日本惣國風土記に記せる横走神社は今の十里木の八幡社にして

本書の岩壺の清水とも符合すればなり。

横走の名義につき、東海道名所圖會には「不二の直走スエリに對したる名あるべし」と云へど、須走は砂走の義にして横走は横走井の畧あるべし。又た枕草紙、關はの章に横走の名出で、清水濱臣註して「平兼盛集に、よこばしり清見が關の通路にいつといふことはあぐとどめつといふ歌あるによりて見れば伊豆國にや」と云へるは覺束あり。蓋、北條氏の伊豆に威を振ひし頃は駿河も其勢力範圍内にありて同じく伊豆と稱せしことあればなるべし、

夫木集 いかにせんすぐには行かで足柄や横走する人の心を

源仲正

富士山 不二、富二、不死、不盡、不字、不見、布士、風士、降士、婦盡、富兒、富地、富慈、

富岷、福慈、福地、福智ふちあど和漢の書に宛字甚多し。異名も躬恒秘藏抄、藻汐草あどに出でて其數

夥し。二十山、柴山しば、時知らぬ山あど屢々歌によまる。名義については不死竹取、フセ物語、覆フセの山新風、チン秀奇又

は火靈異ホグシ、樺太に用ひらるゝアイヌ語火又は小の諸説あれど確説なし。詳しくは吉田氏の地名辞書フジ石の義

を見るべし。本朝通鑑、神社考等に孝靈天皇五年乙亥一夜にて富士山湧出し同時に琵琶湖開くと云へ

るも所謂傳説に過ぎず。山邊赤人の歌に「天地のわかれ、時に神さびて高く尊き駿河なる布士の高

根を天の原下」とあるを正しとせんのみ。其高さを本朝語園高山の部にに、直立二十六町と記せるは何處に

て計りしものか。現今の精測に由れば實に一二三六五尺最頂は尚ほ五尺を増す即ち一里に足らざること僅に一町

三千九間あり。記事の詳細は駿河新風土記、國鎮記、東海道名所圖會其他紀行、案内等に載れれば

茲には總て省畧し、只噴烟の事に就きて少しく述べん。

まづ本朝文粹富士山記都良に香作に「其在遠望者常見煙火」万葉二に「不二の高根は天雲もいゆきはばかり飛ぶ鳥もとびも登らず燃る火を雪もて消ち降る雪を火もてけちつ」其他日本紀、續日本記、三代實錄等に依れば上古盛んに焚焼しつゝありしこと著く。義梵六帖には蓬萊山と記し頂有「火煙」と書けり。竹取物語登天の段は寓言ながら烟の立てりしは事實あり。古今集の序に「今は富士の山も煙立たずなり長柄の橋も作るなりと聞く人は歌にのみで心を慰めける」と見わたるは彼の清和天皇の貞觀六年の大焚焼より古今集の成れる延喜五年まで四十餘年に及べば或は富士の烟も立たずありし時からん。但、餘煙容易に收まらざりしと見る、本書（後一條治安元）に「山の巔の少し平らぎたるより烟は立上る夕暮は火の燃え立つも見ゆ」と記せるほか、西行物語に「僅に不二の高嶺を見あぐれば折知り顔に煙立ち上り云々風に靡く不二の烟の空に消えて行衛も知らぬ我思ひかな」

朱雀天皇承平七年十一月不二山神火水海を埋む（日本記畧）

一條天皇長保元年三月七日此頃不宇御山焚く（本朝世記）

白河天皇永保三年二月廿八日富士山焚く（扶桑畧記）

鳥羽天皇天永三年十月廿九日東方に當り晝夜鳴動あり何れの處あるを知らざるに富士山噴火す

（中右記）

家集、草深みまだきつけたるかやり火と見ゆるは不二の烟ありけり。大中臣能宣一條正曆二年卒

風雅、田子浦の藻鹽もやかぬ五月雨に絶わぬはふじの煙ありけり。清輔高倉治承元年卒

新古今道すがら婦じの煙もわかざりき晴るゝ間もあき空の景色に頼朝。後鳥羽建久九年卒

然るに後堀河貞應二年の海道記に「不二の山の巔に二泉あり湯の如く涌くといふ云々問ひきつる不
士の烟は空に消て雲に名殘の面影ぞ立つ」後宇多建治三年の十六夜日記に「不二の山を見れば烟も
立たす昔父の朝臣平度繁也に誘はれて、遠江の國までは見しかばふじの烟の末も朝夕確に見わく物をいつ
の年よりか絶わくと問へば定かに答ふる人だになく」とあるによりて考ふれば後堀河後宇多の御代
頃よりは既に蒸烟の見わざるに至るか。藤實晴母東路の記には「明らけき御代の時しる不士の根
やけぶりも雲も空に消わつく。煙の末も一條院の頃迄は定かに見しと云ふもあれど近き世には知れ
りといふ人もあし」とあり。又た植松脩道名勝志に「貫之も今は不二の烟も立たすと書けりされど此
山の頂に登りて遊覽するに今も磐の間より糸筋の如く烟立昇る遠所よりは見わず」と記せる由駿河
新風土記に載て其烟の次第に衰へたる様窺ふに足る。

然りと雖も東山天皇の寶永四年現に寶永山の噴起せるあり光格天皇の寛政四、六、廿九日にも夜不二
山震動して岩石を飛ばし死者二十余人と塵泥に見わね、仁孝天皇の天保六、二、八日にも富士山震動し
ユキシロ雪塊飛散すと甲洲人渡邊某の記録に存せる由あれば所詮富士山は未だ間歇的火山たるを免れ
じ左の一首は余が最も愛誦する富士の歌あり。

心あての雲間はなほも麓にて思はぬ空に晴るゝふじのね 大菅中養父

富士川 庵原郡と富士郡との境をあせり。一流域、古今大變動ありて今は昔よりは約三里、西方
によれるか如し。吉田氏は「往昔は河道岩本より東に走り傳法村の南をすき川成島の邊に於て海に
入れり」と説かれたれども猶それより東を流れたる時代もありしあるべし。風土記に曰く庵原郡東

限三蒲原榎田堤今の蒲原は河西にあれども古の蒲原西限三西奈山今龍ヶ崎一南美勢田子浦之間、北
 限三太平山今黒川と山公林。駿河新風土記卷九に之を引て曰く「此蒲原榎田堤とはいづくとも知らざれども
 案するに吉原の邊ならべし榎田の地名今依田橋依田原等の村あり此依田橋村の中今沼川の流あり此
 邊昔富士川の舊道ありと云説あれば依田則ち榎田にして上古此所名高き堤ありてを東の限とし加島
 と云ふ地総て本郡庵原に入りしからん」と。駿河名勝遺蹟にも「傳へ云古はは松岡加島村水神の森一名か
り渡船場なり岩本との際に河水流れて本瀬は吉原町の北今泉の日吉の前を流れ沼川と合し三股淵とあ
り砂山鈴川停車場の南丘、眺望殊によるしの麓にて小子一名雄度の海に入る支流は幾筋となく廣き河原に縦横に流れ廣がり
 しと云ふ」と云へり。げに十六夜日記に「數ふれば十五瀬をぞ渡りぬる」と云ひ、又現に宮島森島
 水戸島柳島五貫島など云へる地名の存するを見れば往昔岩淵蒲原の間數派の水奔流して茫漠たる洲
 堵を爲せしこと推して知るべし。(二)通路、古來常水には舟渡ありしが今は岩淵松岡間仮橋を架して
 人馬の往來自由あり。汽車の鐵橋は其下流にありて長さ一千八百呎と稱す。鎌倉時代には蒲原より
 富士郡砂山の麓を見通し海岸に沿うて川、成島、鮫島小須寺を経て川を繰舟にて渡り砂山の見附に上り
 し由あるも道灌の平安紀行に岩淵に於ての吟咏あれば岩淵の渡は久しき以前よりのことと思はる。
 又た名所方角抄に「此川に岩本の渡と云ふ名所あり蒲原より一里許北へ上りて船にて渡るあり」とあ
 れば岩淵の上流岩本今松岡と合せて
岩松村と稱せりも古への渡なりしならん以上三所の中孝標の女は孰れを通りしか
 詳かあらねど恐らく岩淵あたりを過ぎたるあるべし。(三)其急流ある事、は丙辰紀行に「我國に名を
 得たる大河は數多あれど茲に富士川は海道第一の急流也舟に乗りて渡るに渡守力を出りて竿を指し

櫓を押出す時岸より見る者はあはやと危く思ひ船中の人は目舞ひ魂の消る心地ける。とあるを初とし、光行海道記、羅山文集六十一、東遊行囊抄十二等あらゆる書に見えたり國名スルガも蓋し此河の駿きに因める名あらんか。慶長十二年徳川家康角倉與七光好をして船制を定め瀬灘を疏鑿せしめしかば今は甲斐の鯀ヶ澤より富士川村大字岩淵に至る水路十八里を一掉箭の如く僅に六時間にて降るとぞ。

平家物語 富士川の瀬々の岩越す水よりも早くもたつる伊勢平氏かゝ 落書

道行ふり 夜船こゝ富士の川とに霧晴れて高ねに出つる月を見るかを 眞淵

清見關 關址は興津町大字清見寺町清見寺門前と云ふ説を當れりとす。一に清見寺の關の稱あればあり。日本紀畧承平三年の條に岫ヶ崎關と云へるも恐らく此關のことなるべし。岫崎は一名磯崎とも云ひて清見寺の東方約二十丁薩陞山尾にある險所なり。古來激浪岩を嚙み、過る者其後を顧みるに暇なきを以て親不知子不知と呼べりとかや。東關紀行に「沖の石村々鹽干にあらはれて波に咽び磯の鹽屋所々風に誘はれて煙柳引けり東路の思出ともありぬべき渡あり」。海道記に「清見關を見れば西南は天と海と高低一つに眼を惑はく東北は山と磯と險難同じく足を爪だつ、磐の下には波の花風に開きて春の定めあく峰の上には松の色緑にして秋を恐れず云々行客こゝになづさはりて暫くよせひく浪間をうかどひて急き通る」盛衰記廿三に「身をそばめて行き足を時て歩む軍監清原澎湃が漁舟火影冷燒波驛路鈴聲夜過山と一首の唐歌を詠じけんもこゝなりかし。以て地形の一斑を察すべし。明暦元年紀元二
三一五 朝鮮人來朝の爲め、薩陞山上に道を開きて親不知子不知の險を避けしが物變

り星遷り今や海潮故岸を去る數十歩の外を洗ひ、第一第二の墜道は岸に沿うて穿たれ、汽車中の旅客は海山の奇を送迎するに遑なきばかりなり。

因に云ふ。興津は吾妻鏡には興津にも沖津にも作れり。延喜式の驛家には息津と記せり。又、特に注意すべきは前記磯崎を庵崎と誤り、それに紀伊の亦打山武藏の角太河を附會せる書あることこれあり。紹巴の富士見道記の如き其例あり。吉田氏の辭書を見よ。清見寺は興津停車場を去る西の方七八丁に在りて關の床板を其儘天井に用ひ一室ありと云ふ。關に用ひたる突棒、差股、鋸の三つも今猶秘藏せりと云ふ。寺の傳記には「清見原天皇の御代此に清見關を置かる側に一小堂を作り此關の鎮護とす是れ清見寺の創建なり」とある由。

廢關の年代は不詳と雖も丙辰紀行に「清見關は延暦の頃奥州の逆賊高丸が駿河國まで攻入りこの關に陣を取りしを坂上將軍討破りて高丸奥へ退きしこと久しければ語りも傳へ侍らず」とある如く田村麿の頃には存せしこと疑なく、次に朝野群載なる天曆十年國司の解狀に「駿河國西は云々東は云々境内に清見横走の關を帶す」と見ゆれば村上帝の時までも同じく存せしこと明かに、更に降つて長元年中に猶關屋の存せしこと本書史料に徴して知るべし。

新後撰後二條嘉元六年撰 關の戸はまだ明けやらで清見漏空より通ふさよ千鳥かな
續千載應仁二年撰 さやかある名をば止めて清見漏傾く月に關守ぞあき

田子浦 多籠、田兒、多胡とも書けり。現今なべて鈴川を中心とし西は富士川まで東は柏原まで凡三里餘の間の海濱を稱すれども古へは然らず。其証は東國紀行蒲原條に「田子の浦といふは此邊

にやと尋ねれば清見關の此方六里ばかりの程皆田子浦と云ふ。名所方角抄に「上蒲原よりは東也、三保の入江より浮島が原までの浦なりなべて田子浦と惣名に云なり清見關奥津と其内の小名あり」十六夜日記殘月抄に「興清按に古への田子浦は賀茂翁の百人一首初學、百井塘雨が笈埃隨筆の説の如く薩陞の山陰の磯にて今の倉澤のつゞきの海濱なる」とは更級日記に……と書るにて知るべし」あごあり。吉田氏も古今の差異を認めて「今蒲原町の管内吹上小金の邊の舊名とす即ち富士川の河口西岸にあたる然るにいつの世よりか富士郡吉原の南を田子浦とよび蒲原なるは其名を失へり」と云はれたれども猶方角抄の説をば取らずして「田子浦は廣く及ぼし見ても薩陞山の東方に限る興津清見に及ぼすべからず」と難せられぬ。そは兎も角、孝標女の載する處は興清の所謂薩陞山陰に相違あかるべし。浪高くして一騎打の狹路を過ぐるを得ず已むを得ず船にて漕ぎ廻れるかに見ゆればいり。

田子の浦やふじの高根の影見わて波もひとつにふれる白雪 頓阿法師

焦思鹽竈爨空烟 世路艱難最耐憐

坐愛風光多子蟹 擔頭潮汲月明還 澤庵和尚

沼尻 江尻の思ひ誤からん江尻は府中の東三里にありて清水港に接せる地あり。蓋し上古以來天正の末までは江尻より高橋、大内、瀬名川、上ヶ土、沓の谷を経て横田今之靜岡に至る北方の路を官道としたりき。あは是より丸子、宇都ノ谷嶺、岡部、藤枝、嶋田にかゝりて初めて大井川に達すべき順序なるに此更科には只「する／＼と過ぎて」と一筆もて書き畢れり。かの伊勢物語りにて有名な

る宇都谷嶺の如き通らば必ず書かるべきに其名の見ぬこそ不審あれ（彼の嶺は高さ約百三十四丈ありて古へは行路山上を通せしも今は中腹に長さ二町二十八間の隧道を穿てり（明治七年五月起工）。思ふに延喜式の驛傳は駿河有渡郡横田今の静岡志太郡小川今の焼津の南遠江初倉今の坂本大柳の邊と續けり。日本武尊の通り給ひし道は即ち此驛路と同じかりし由なれば孝標の女も或は道を此南方に取りて宇都山をばよそにかしたるにや。

大井川

古より駿遠の境をなせる川あり。されどその流域多少の變遷あきにしもあらず。即ち今

は初倉邊より東南に向つて流るれども昔は正東に走りて遠江の小杉村と駿河の一色村との間を過ぎ

田尻濱に至りて海に注げる事藤田氏の鎌倉時代の東海道今は駿河の内陸史地理卷十二號に詳述せられたるが如し。十

六夜日記に「水いとあせて閑しにはたがひて煩ひなし河原幾里とかやいと遙かなり水の出たん面影

わしはからる」と云へるが如く平時は水甚だ深からずと雖も一朝水量を増さんか奔波人の膽を奪ひ

其幅も亦一里に達すとあむ。先づ日本風土記に曰く「大猪川爲其堺四時洪水霖雨之時者往返控馬、

笠蓑經日朽破、涉月其水派未治、最爲邊要」。丙辰紀行に曰く「明日香川あすかならねど霖雨降れば淵瀬變

ること度々なれば東の山の岸を流れて島田の驛河原の中にある事もあり西の方に流れて金谷の山に

そふこともあり又一筋の大川となりて大木沙石を流すこともあり數多の支流とありて一里可りの間

に分ることもありされば古より島田金谷の民己が家は漂ひ流るれども旅客の囊を貧る故に洪水を悦

ぶ。東遊行裏抄九に曰く「川原の間凡廿餘丁水常に濁つて水底に石を流す日夜瀬變りて常に不定、

故に昔より船なし南風に水増し北風に水減す東海道第一の難所なり」其他海道記東關紀行、名所方

角抄、雅世卿の富士紀行、尊海の吾妻の路記、宗長手記の下、東國紀行、盛衰記四十五、太平記二、東海道名所圖會、新撰駿河國誌等總て此川の形勢を説かざるはなし。徳川時代渡津たりし時の狀況は歴史地理第三卷第三號大森文學士の姫街道と大井川蓮臺渡といふ論文に詳かなれば就いて見るべし。明治十五年以降は七百二十餘間の長橋を架して島田より金谷に通じ又明治廿二年其下流に三千三百三十九呎の鐵橋を設けて漁笛一聲河伯を叱咤して過ぐる至れり。あはれ雲助今何處にかある。奔流亦是れ車窓旅情を慰むる資料とあり畢りぬ。

大猷院御
みちの記

大井川漲る水も世につれて静けき御代の流ありけり 大橋入道

東關記

瀬は淵と思ひかはさば大開川人の心の底も頼もし 澤庵和尚

さやの中山

遠江國小笠郡にあり。金谷より日坂に越る小嶺の名にしてかの菊川の里今榛原郡金谷村の大字

は此麓にあり。古今集以下の撰集に甚名高く、古今集にも八雲抄にも本書更にもさやの中山と云へるに新後撰集、宗祇の方角抄、尊海僧正の吾妻の道の記などにはさよの中山と記せるより推せば、初めはさやと云ひ、後ち普通にてさよと呼びしものか。あはれ宗久が都の苞に辨せるを見るべし。さて紹巴富士見道の記に「長山と書けるもさよこそは二三里が程山の頂一文字にしてさよ山の傍なり」。海道記に「此山口を暫く上れば左に深谷右も深谷一峯長き道は堤の上に似たり」とありて阪路左右共に磐谷に臨み歩々松杉の梢を行くに似たる様想ふ可し。現時金谷中山間新開路あり舊路よりは稍々平夷なれども二十丁餘の迂路なりとぞ。日坂には名代の餅あり。宗牧其著東國紀行に記して曰く「さよの中山にかゝり日坂と云ふ茶屋に休みて名物の蕨餅を賞翫、たゞにはいかにて、年

たけて又食ふべしと思ひきや藤もちひも命なりけり」と詠めるは西行が「命なりけり」を洒麗たるなり。

蓋し、當時大开川は今の金谷町内を流れ驛路は迂回して牧野原に出でたるよしあれば孝標の女も牧野原を経たるなるべし鐵道も掛川より此山の南方にかゝり堀の内まで迂回して金谷に達せり。

古今集 甲斐がねをさやにも見かけけれかく横ほり伏せるさやの中山

坂道昇降是早天 夢殘馬上不成眠

此山無限西行詩 能便詠歌千古傳

林羅山

(未完)